

令和元年度 まちづくりカフェ 概要

日 時 : 令和元年1月28日(火) 18:00~20:00
場 所 : 万場町のくらし(新庄市万場町5-16)
参加者 : 23名
主 催 : 山形県

新しい視点で活動している若者等の事例紹介や考え方に触れることにより、商店街関係者や地域住民等の意識啓発、まちづくりに取り組むきっかけづくりや参加者同士のネットワーク形成を目的として「まちづくりカフェ」を開催しました。

▼ 事例発表

<デザイナー 吉野敏充氏(新庄市在住)>

東京で就職したが、東京で地元の野菜を売る「セガレ」の活動を通して地元のことを知りたくなり、地元の廃校で売るようになった。新庄には誰かが手を上げたら周りが助けていくような素地が以前からあり、色々な出会いによりマルシェを立ち上げた。マルシェを中心にコミュニティが広がっており、人とのつながりで仕事をしている。その他、最上伝承野菜のPRや、工芸との関わりでは作家が見えるようなつくり・デザインで、情報の窓口を増やす取り組みをしている。

最近の活動としては、季刊フリーペーパー「にゃ〜」を発行し、地域の人が読んでも面白いように最上地域の情報を深く追求し、発信している。2019年12月で10号を数える。

<一般社団法人 最上のくらし舎 代表理事 吉野優美氏(新庄市在住)>

人生のテーマは「笑顔で生きること」。新庄市の地域おこし協力隊(商工観光課・情報発信拠点整備担当)として、2016年1月にコワーキングスペース「GOSALOn・ゴサロ」を開店(2018年3月閉店)。2017年5月からゴサロにて、加藤優一氏と共に「空き屋プロジェクト」を発足。行動することを目的とした実践型の勉強会を毎月開催し、空き家妄想ツアー、お掃除ワークショップ等を経て、2018年5月に喫茶+間貸「万場町のくらし」を開店させる。店舗名である「のくらし」という言葉には、「私のくらし、あなたのくらしが充実することで、地域のくらしが豊かになる」という願いが込められている。開店から1年間で開催したイベントは85回ののぼり、内容は日常系24%、福祉系の勉強会20%、モノづくりのワークショップ等16%、その他(勉強会等)40%。店舗内には地域のみなさんのくらし(品々)が持ち寄られ、地域に育ててもらったような暖かみがある。「ここでなら(仲間と一緒に)思いっきり笑える。」と語った。



▼ パネルディスカッション

- コーディネーター 山形エリアマネジメント協議会
チーフディレクター 佐藤 克也 氏 (新庄市出身)
特定非営利活動法人アンプ
理事長 齋藤 一成 氏 (新庄市在住)
- パネリスト デザイナー 吉野 敏充 氏 (新庄市在住)
一般社団法人 最上の暮らし舎
代表理事 吉野 優美 氏 (新庄市在住)

(佐藤氏)

それぞれ、どのような動機・目的でまちづくりに取り組まれているか。

(齋藤氏)

最近、一周回って「商店街の活性化って何だろう」と考えている。自分の育ったまちが、段々元気がなくなってきた。これからの子供たちにどんなまちを残してあげられるのかということを考えてやっている。

(吉野(敏)氏)

高度経済成長以来失われたつながりを、対面の販売をすることによって、買うだけじゃない価値が生まれたらいいな、関わる人が楽しく暮らせたらいいな、色々な人と関わって楽しく過ごせたらいいな、と考えてやっている。

(吉野(優)氏)

自分のモットーとして、笑って生きていきたいということがある。空き家はただの現象にすぎず、寂しく感じるのは人間である。悲しい人を見るのは悲しいので、まちづくりをやっている。

(佐藤氏)

まちづくりを進める上で、「こういったまちにしたい」というイメージやビジョンを持つことが大事。「ねばならぬ」でなく「したい」から始め、やりたいことを実現する場をつくる。そのためのまちづくりと考えてほしい。

(佐藤氏)

キトキトマルシェは9年目とのことだが、飽きさせない工夫は。

(吉野(敏)氏)

今の自分が興味を持つこと、人をマルシェで提案し続けることが、飽きがこないことにつながると思う。地域内では、誰かを弾こうとする力が働いたりするが、「まあ良いじゃん」という多様性を大事にしている。

(佐藤氏)

空き家の改修から「万場町 のくらし」のオープンまで、わずか1年間でやり遂げることができた要因は。また、失敗談は。

(吉野(優)氏)

キックオフの人材がよかった。また、パッション担当(吉野(優)氏)・戦略担当(加藤氏)・資金担当(国・信金)というチームがよかった。

メディアに取り上げられた際など、見えている部分はきれいだが、失敗や不安はたくさんある。本当に法人化して大丈夫か不安だったし、お店を開けても閑古鳥などもある。今でも日々試行錯誤を繰り返している。

(佐藤氏)

人口減少や消費の減少が問題とされる中、新庄市で活動することの魅力は。

(齋藤氏)

そこに実家があったから。

(吉野(敏)氏)

自分のデザインについて、以前は自分のデザイン・表現を重視していたが、相手の話を聞く時間や相手との関係性を大事にすることがデザインにつながるようになった。現在では、デザインというよりカウンセリングに近い感覚がある。

(吉野(優)氏)

山形県内でみると、人口比で最上地方は1人当たりの面積が広く、その分自由度が高いと言えるのではないか。新庄(最上地方)の人は、何かやったときに面白がってくれる人が多く、また、生きる力が強いと感じている。

(佐藤氏)

新庄市のこれからについて。

(齋藤氏)

自分が活動を始めた16年前と比べて、あちこちで色々なことをやる人が増えた。自分は早すぎたのかなとも思う。新庄の人は勉強(会)が好きで、学んだことがアクションに生かされているように思う。今後は、どこを見てどういう動きをしたいのか等、先を見たプランニングができる方がもっと出てくることを願う。

(佐藤氏)

まちづくりに興味のある方に向けて、先輩からのアドバイスをお願いしたい。

(吉野(敏)氏)

前職では、会議で発言すること、人前で自分の言葉で喋ることを求められる機会が多く、間違ってもいいから議論を重ねていくことでいい物ができる。無口でいるよりも、どんどん自分のことを話せる人が増えたらいい。そしてそれを否定することではなく、受け止められる人が増えたら多様性を持てる地域社会ができていくと思う。

(吉野(優)氏)

周り・地域の人達に「聞くこと」と「お願いすること」が大切。始める前のあいさつ回りや、お願いしたいことなど、最初は気持ち悪いと思われるかもしれないが、先にやった方が絶対によい。また、自分は地域おこし協力隊の肩書があったことで、やりやすかった。

(佐藤氏)

行政として、まちづくりへの関わり方は、どのようにしたらよいか。

(齋藤氏)

自分は行政として関わっていない。一民間としてやっている。可能性があるとなれば民間側からのアプローチと思われるので、「自分は補助金をあげる側」という考えでなく、一市民として、同じフィールドから話をしたらよいのではないか。

(佐藤氏)

事前質問の他に、この場でどうしても聞きたいことがあれば。

(参加者)

齋藤氏は20年、吉野敏充氏は10年、吉野優美氏は5年まちづくりをやられている。1年目の自分に何かアドバイスするとしたら、どのような内容か。

(齋藤氏)

「悪いことは言わない、やめておいた方がいい。」自分の20年前は不安で仕方がなかったので、とにかく周りに話した。自分1人で考えたものよりも練られたプランになっているはずであり、根拠はないが自信になった。

(吉野(敏)氏)

「儲からないよ。でも、やりたいならやった方がいい。」自分は聞くこと、聞く時間を大切にしているので、やっている人に「それ、楽しいの？」など話を聞きたい。

(吉野(優)氏)

自分は周りが何を言っても止められない性質の人間なので、「好きにしろ。」としか言えない。当時、信用金庫の職員からは、「安請け合いはするな。」とアドバイスをいただいた。

(佐藤氏)

まちづくりをやっていて儲かっている人は、ほとんどいない。山形市内で平成 31 年 4 月～12 月で約 40 店出店しているが、お店をしたいという自分の理想に必ずしも収益がついてくるとは限らない状況にある。まちづくりについても、同様に理想と現実が異なることが多いので、よく考えてみてほしい。

総括 (佐藤氏)

そのまちは、そこに住む人、関わる人以上のまちにはなりません。参加者の皆さんには、「こうしたい」という思い、ヴィジョンを持ちながら、一緒にやってくれる仲間をつくって、それぞれのまちづくりに取り組んでもらいたい。

